

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 梅 川 佳 子

論 文 題 目 チャールズ・テイラー政治哲学の形成
(1956-1970年)

論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院法学研究科教授 田村 哲樹

名古屋大学大学院法学研究科教授 小野 耕二

名古屋大学大学院法学研究科教授 姜 東局

論文審査の結果の要旨

I 論文の概要

市民は政治にどのようにして関係するのかという問題は、政治学における重要な問題の一つである。本論文は、この問題を念頭に置きながら、現代の代表的な政治哲学者の一人であるチャールズ・テイラーの政治哲学について、特にその思想形成期（1956年～1970年）に焦点を当てることで、新たな解釈を引き出そうとするものである。

テイラーに関する先行諸研究は、1980年代以降の彼の円熟期の諸著作を中心的に取り扱ってきた。しかし、本論文は、そのような研究のあり方がテイラー理解に、以下のようないくつかの問題点をもたらしていると主張する。第一に、テイラーにおける個人とコミュニティとの関係についての理解の問題性ないし不十分性である。第二に、テイラーの思想基盤についての理解の不十分性である。第三に、テイラー理解の問題性の理由の一つとしての、彼の実際の政治的実践の考慮の不十分性である。

これらの問題点に対して本論文は、思想形成期テイラーの諸著作と諸実践を検討することで、次のように主張する。第一に、テイラーにおいては、個人は自律した主体として理解されており、そのような個人が「ラージャ・ライフ (larger life)」を媒介として「対話社会」としての政治共同体を形成すると考えられているということである。すなわち、著者はテイラーを、個人主義を基礎とした政治哲学者として理解し、そのような個人がどのようにしてコミュニティを形成すると彼が考えていたのかを明らかにする。第二に、テイラーの思想基盤には、不平等あるいは疎外の克服という問題関心が存在していることである。しばしば先行諸研究において、テイラーにおける不平等や抑圧といった問題の軽視という指摘が見られる。これに対して、本論文は、彼の思想形成期を扱うことで、テイラーが、個人のラージャ・ライフの実現にとって不可欠な条件として、現代社会における様々な疎外の克服という問題関心を明確に有していたと主張する。第三に、以上のようなテイラー像は、彼の政治哲学的著作だけではなく、政治的実践にも光を当てることでより明確なものとなる。このような立場から、本論文は、テイラーによる、スターリニズムとの関係でのハンガリー難民支援活動（第1章）、核兵器廃絶運動（第2章第1節）、カナダの新民主党副党首としての政治活動（第5章）などを取り上げる。このようにして、本論文においては、思想形成期の諸著作と諸実践に注目することで、円熟期のテイラーの諸著作を中心とした読解とは異なるテイラー像を描き出すことが試みられるのである。

本論文は、以下のような構成をとっている。序論では、市民と政治の関係について、他の代表的な政治哲学者の議論、具体的にはロバート・ノージック、ジョ

論文審査の結果の要旨

ン・ロールズ、マイケル・サンデル、ロバート・ベラーの議論を参照しつつ、テイラー政治哲学に接近する際の本論文の問題関心が述べられる。その上で、上記の本論文の主張が提示され、先行諸研究の整理とそれらに対する批判が行われる。また、本論文の構成が、テイラーの実践と著作を時系列的に追跡する形となっていることの意味も述べられる。その理由は、まさに「思想形成期」において、テイラーの政治哲学の諸特徴が、時代状況に直面しての彼の様々な実践や著述を通じてプロセスとして形成されてきたことを明らかにするという点に求められる。

続く第1章から第5章が本論となる。まず、第1章「ハンガリー難民支援活動」では、1956年10月のハンガリーにおいて、市民の抗議活動・蜂起に対するハンガリー共産党とソ連共産党による武力弾圧に伴って発生した膨大な難民に対するテイラーの支援活動が取り扱われる。彼は、オーストリアのウィーンに赴き、1956年11月から1957年の春まで、現地でハンガリー難民支援の活動に従事した。また、テイラーは、彼自身が創刊に関与した雑誌 *Universities & Left Review* に、スターリニズムを批判するいくつかの論文を書き、それに対抗する意味での自由と民主主義を擁護した。本論文は、このようなテイラーの実践と著述活動を、スターリニズム下での疎外を批判する試みとして理解する。

第2章では、1957年から1960年までのニューレフト時代が扱われる。本章の目的は、テイラーにおける「疎外論」の展開を跡付けることである。この時代にテイラーは、スチュアート・ホールらとともに上記の *Universities & Left Review* を創刊し、初期マルクスの『経済学・哲学草稿』に影響を受け、マルクスの「ヒューマニスト」の側面と疎外概念に注目した理論活動を展開する。テイラーは、現代社会における疎外を克服するために「ソシャリズム」の理念が重要と考えたが、その核心は人民による「社会的コントロール」としての「民主化」にあった。これは、イギリス共産党系のコミニズムとは異なるものであり、それゆえテイラーは、コミニズムに一定の理解を示したエドワード・トムソンと論争も行っている。その際、テイラーは、コミニズムそのものにスターリニズムの萌芽が存在すると捉え、自らのソシャリズムとコミニズムとを明確に区別した。

第3章は、博士論文をもとにしたテイラーの初の単著である『行動の説明』（1964年刊）が取り上げられる。本章の目的は、テイラーの個人主義的特徴の基礎をこのテキストに見出すことができることを示すことである。すなわち、本論文は、同書においてテイラーが個人を自律した主体として捉えていたと主張する。同書においてテイラーは、当時の科学的な行動論心理学に対する批判を試みている。彼は、行動論心理学の刺激・反応理論では行動の「意味」や「目的」について説明することができないことを問題にする。とりわけ、行動論心理学が目的を行動から分離した実体として把握することは問題である。なぜなら、このような

論文審査の結果の要旨

心身二元論的な目的把握においては、目的は結局のところ観察不可能なものとなってしまふからである。それゆえ、テイラーは、このような目的把握を「神秘主義」「非科学的でいかがわしいもの」として強く批判する。これに対して彼は、人間の行動をより主体的で目的的なものとして把握するべきであると主張した。心身二元論とは異なり、テイラーにとって、そのような主体性・目的性は行動の中に組み込まれているものであった。また、それは、「社会で通常ひろく持たれている見解」としての「日常的説明」によって根拠づけられるものであった。このようにして、『行動の説明』においてテイラーは、日常的な人々の行動の中に自律的な主体性が見出されることを主張した。したがって、本論文は、同書が思想形成期のテイラーが個人を自律した主体として捉えていたことを示すテキストであると解釈するのである。

しかしながら、『行動の説明』においては、諸個人の「目的」とは何か論じられているわけではない。この問題は、次の第4章において考察される。また、この章では、諸個人がどのようにして政治共同体と接続するのかという問題、および、そのような接続を妨げている要因は何であるのかという問題が扱われる。主たるテキストとして取り上げられるのは、1970年に刊行された『政治の形態』である。なぜなら、この著作において、上記の諸問題が論じられていると考えられるからである。すなわち、『政治の形態』においてテイラーは、主体としての諸個人の目的は、「ラジャー・ライフ (larger life)」——それは「なんらかのより崇高な、十全な、より意味のある生活と接触したいという普遍的な人間の切望」を意味する——を持つことであり、そのことによって諸個人の政治共同体への接続が可能となると主張するとともに、現代社会においてそのような目的の実現を妨げている要因としての様々な疎外の問題を論じているのである。

個人と「ラジャー・ライフ」との関係の理解において、注意すべきことは以下の諸点である。第一に、テイラーの議論の出発点はあくまで「個人」だということである。確かに彼は、人間にとっての「コミュニティ」の重要性も論じている。しかし、その場合でも、コミュニティはあくまで個人のアイデンティティ形成のための「手段」であり、それ自体が目的なのではない。第二に、個人には、ラジャー・ライフを実現するために、「公共的生活」から受け取るだけでなく（レシピエント関係）、それに積極的に関与していくことも求められる（ドナー関係）、ということである。このように、ラジャー・ライフ概念を媒介とすることで、テイラーは、個人を出発点としつつ、それが「コミュニティ」や「公共的生活」と接続することを論じたのだと著者は主張するのである。

ただし、本論文の特徴は、テイラーの特徴を、個人の主体性の実現を妨げる疎外について論じるところにも求める点にある。したがって本章では、上記のよう

論文審査の結果の要旨

なラジャー・ライフの実現を妨げる要因として、テイラーが宗教的疎外、社会的疎外、政治的疎外の三つの疎外を挙げて論じていたことも指摘される。そして、そのような疎外を乗り越えた社会を作るためには「対話社会」が形成される必要があるとテイラーが考えていたことが述べられる。対話社会によって、諸個人の間にも共通の意味が形成されることをテイラーは展望していたとされるのである。

続いて第5章においても、第4章と共通の問題、すなわち、現代社会における個人と政治共同体との関係という問題、および、それを妨げる疎外の問題が扱われる。ただし、第5章においては、より具体的な次元で、すなわち、カナダにおけるテイラー自身の政治活動の実践を踏まえつつ、彼の現代政治と現代資本主義に関する分析を通じて、上記の諸問題が検討される。

既に確認したように、テイラーは、現代資本主義における疎外を、彼が抱くソーシャリズムの理念に照らして取り組まれるべき重要な課題と見なしていた。そのようなテイラーには、現実のカナダ政治における二大政党は、資本主義社会に対する批判意識が極めて稀薄であるように思われた。そこで彼は、現実のカナダ政治と資本主義を次のように批判した。まず、政治については、進歩保守党と自由党の二大政党による政治を「コンセンサス政治」と呼び、それは「政治的道楽主義」に陥っているとして厳しく批判し、有権者に「真の選択肢」としての政策を提示できるような政党の必要性を主張した。次に、資本主義については、現代社会、特にカナダにおけるそれが、巨大企業が支配し、富裕層が優遇される大企業資本主義と化していることが批判される。そして、このような資本主義の問題点を克服する「選択肢」として、「ソーシャリスト・モデル」が提起される。ここでは、社会的ニーズを基準として経済的投資が行われるようにするための政府の役割（とりわけ政府による「投資基金」の設立による重要部門に対する選択的・計画的な支援）、アメリカからの経済的独立、脱中央集権化と参加社会の促進、そして左翼勢力の連合、が唱えられた。

カナダの政治と経済に対するテイラーの批判は、著作活動を通じてのみ行われたのではない。彼は、この批判を自ら実践しようとした。すなわち、テイラーは、二大政党に対抗する第三党としての新民主党の副党首となり、1962年から1968年にかけて、連邦議会選挙に4回立候補したのである。結果はいずれも落選であったが、ニューレフト時代からのテイラーの実践への志向性は、カナダにおいても発展的に引き継がれたのである。

最後に「結論」において、本論文の内容が要約され、本論文の意義が述べられるとともに、今後の課題が指摘されている。まず、内容については、本研究が扱ったテイラー思想形成期を通じて、彼の政治活動、個人論、疎外論における発展が見られたことが確認される。次に、本論文の意義については、政治思想研究と

論文審査の結果の要旨

現代政治学のそれぞれに対する意義が述べられる。まず、政治思想研究に対する貢献は、次のようなものである。第一に、テイラーにおける個人主義とコミュニタリアニズムとの関係という論点について、青年期の諸著作の検討を通じて個人主義が優位にあるとする立場を明確に打ち出したことである。第二に、やはり青年期の諸著作の検討を通じて、個人主義のみならず、テイラーにおけるソーシャリズムという理念の重要性を明らかにしたことである。第三に、テイラーの著作だけではなく具体的な政治実践にも焦点を当てるというアプローチの意義である。このようなアプローチにおいて、彼の政治哲学における主体、疎外の克服、ソーシャリズムの擁護といった特徴がより明確になったと考えられる。

次に、現代政治学に対する貢献としては、次のように述べられている。すなわち、現代政治学において議論されている人々の「政治不信」と政治からの離脱という問題は、ラージャー・ライフを通じて諸個人が政治共同体に接続されていくというテイラー自身の議論と重なるものであり、したがって、テイラーを参照することは、現代政治学にとっても有意義だということである。

最後に、今後の課題について、著者は、青年期テイラーと円熟期テイラーとの関係、および、「主体性」や「ラージャー・ライフ」といった概念について、1970年以降の諸著作の検討を通じてさらに考察を深めていく必要があると述べている。

II 本論文の評価

1. 学術的寄与

本論文が有する主な学術的寄与として、以下に述べる三点を挙げることができる。第一に、本論文が新たなテイラー像を提示しているという点である。まず、個人とコミュニティとの関係というテイラー解釈における大きな論点について、本論文は、彼において個人主義が優位であるとする立場を打ち出した。先行研究の多くは、テイラーにおけるコミュニタリアン的な要素を強調するか、彼における個人主義とコミュニタリアンの両義性を主張するものである。これに対して、本論文は、思想形成期のテイラーの著作と実践に焦点を当てることで、彼において個人主義が優位であるとの見解を説得的な形で提示した。次に、本論文は、テイラーにおいて、不平等や疎外といった社会主義的な問題が重要であることを示した。しばしば先行研究において、テイラーにはこのような視点が欠けていると指摘されてきたことを踏まえるならば、本論文がテイラーの「ソーシャリズム」の側面を、初期の諸著作と実践から抽出していることは、学界に対する重要な貢

論文審査の結果の要旨

献であると言える。

第二に、一点目と重なる点ではあるが、テイラーの青年期の著作・活動に焦点を当てたことそのものも、本論文の重要な意義と見ることができる。従来の研究は、本研究が扱った時期以降の著作に主に依拠したテイラー像を提示してきた。確かに、しばしばテイラーの代表的な著作とされる『ヘーゲル』(1975年刊)、『自我の源泉』(1989年刊)、『世俗の時代』(2007年刊)などは、いずれも本論文の検討対象以後の時期に刊行されている。しかし、これらの著作に注目するがゆえに、従来の研究では、最初期テイラーの政治哲学の解明が不十分となったとも言える。実際、著者も指摘するように、とりわけ最初の単著である『行動の説明』については、先行研究ではほとんど検討がなされていない。しかしながら、思想形成期の諸著作・諸実践を丁寧に読み解くことで、既に述べたような新たなテイラー像を提起することが可能になったのである。したがって、本論文が思想形成期テイラーの諸著作と諸実践を重点的に取り上げたことは、テイラー研究の隙間を埋めるとともに、新たなテイラー像の提示を可能にしたという意味で、重要な達成であると言える。

最後に、本論文がテイラーの著作だけではなく、具体的な実践にも注目するアプローチを採用していることである。このようなアプローチは、世界的に見てまだごくわずかな研究においてしか採用されていない。しかも、その例外的な先行研究であるマーク・レッドヘッドの研究においても、テイラーの実践として取り上げられているのは、本論文が第5章で取り扱ったカナダ帰国後の政治活動のみである。これに対して、本論文は、それ以前のイギリス滞在時代のニューレフトの理論家・活動家としてのテイラーの実践をも明らかにすることで、彼の「ソーシャリスト」としての特徴が形成されるプロセスを描き出すことに成功している。この意味で、本論文は、著作と実践の両方を見据えたテイラー政治哲学研究を、一歩先に進めるものであると言える。

2. 問題点

他方で、本論文には、次のような問題点も見出される。第一に、本論文を通じて提示されたテイラー像とそれ以降の時期のテイラーとの関係という問題である。たとえば、本論文においては、テイラーにおける個人主義の優位が確認されたが、それが思想形成期以後においても維持されているかどうかは、なお不明である。場合によっては、テイラーの立場が変化したという可能性もある。あるいは、固有に思想形成期を扱うことで、それ以降の時期も含めた全体としてのテイラー政治哲学の魅力がどのように明らかになるのかという問題についても、本論

論文審査の結果の要旨

文は十分に答えているとは言えない。著者は、結論部等において、これらの問題に答える若干の論述を行っており、そこでは、本論文が見出したテイラー政治哲学の諸特徴は円熟期においても継承されている、との見解が仮説的に示されている。しかし、著者も認識している通り、最終的な解答のためには、円熟期の諸著作の精緻な読解を踏まえた研究が求められるであろう。

第二に、著作と実践の両面から接近するという方法についても、なお改善の余地がある。本論文においては、著作分析と実践分析とが並列的に行われる傾向がある。しかし、著作と実践の両方を扱うならば、両者の有機的な連関をより深く探究する必要がある。また、「テキスト主義」と「コンテキスト主義」という政治思想史研究における方法論と両者の関係をめぐる議論とをきちんと踏まえることも必要であろう。

最後に、本論文においては、テイラー理解を深めるための様々な要素が析出されているにもかかわらず、それらの掘り下げや関連付けが十分ではないと思われる箇所が散見される。たとえば、テイラーの行動論心理学への批判と「日常的説明」を経由した主体性の擁護とについては、彼の師であったエリザベス・アンスコムとの関係や、同時代のアメリカ政治学における行動論をめぐる議論動向を踏まえることで、より深みのある論述が可能になったのではないかと思われる。また、ニューレフト時代のトムスンらとの関係の描き方についても、なお改善の余地があるように思われる。

III 結論

以上のように、本論文に対しては、いくつかの問題点を指摘することができる。しかしながら、それらは、既に述べた本論文の学問的意義を決して損なうものではない。「学術的寄与」として挙げた諸点から明らかであるように、本論文は、梅川佳子氏が専攻分野における研究者として自立して研究活動を遂行するために必要な能力を有していることを証明している。したがって、審査委員会は、本論文が博士（法学）の学位授与に十分値する優れた研究であるとの結論で一致した。

論文審査の結果の要旨

論文審査の結果の要旨

論文審査の結果の要旨

